

書 評

できる！ 臨床研究 最短攻略 50 の鉄則

康永秀生 著

私の康永秀生先生に対する印象は“マジシャンのような臨床医学の語り部”です。とても難解で複雑な物事でも康永先生の説明を聞くとなぜかすっきりと頭に入り、なんとなく自分でもできるような気になってしまいます。好評を博した『必ずアクセプトされる医学英語論文 完全攻略 50 の鉄則』の出版から1年半を経過したこの時点で、鉄則シリーズ第2弾『できる！臨床研究 最短攻略 50 の鉄則』を上梓されました。先生の目線の先には常に次世代を担う若手研究者がいます。工夫を凝らして綴られた文章の行間には混沌とした臨床医学の世界で迷える子羊を優しく導くマジックがたっぷり詰まっています。

今日社会が私たち臨床医に求めているものは“科学的根拠に基づく医療 (EBM)”です。しかし、臨床医学はとても不確実です。同じ病名でも患者は多様で、治療に対する効果、有害事象、合併症の発生など多くの事象が確率的に発生します。一方で、私たち臨床医が医療現場で得られる経験は思いのほか小さく、また徒弟社会の面影が未だに残る日本の医療現場では大家の発言や手短な情報に根拠を求めるヒューリスティクスが未だに幅を利かせています。次世代を担う若手研究者の育成環境としては心もとない現状です。

EBMを生み出す強力なツールが“臨床疫学”です。データベースとインターネットの発達を背景に急速に進化する学問的基盤であり、適切に用いれば臨床現場で発生する多くの clinical question に回答を与えてくれます。しかし、誤用をすればとんでもない迷惑を患者にもたらしめます。活用には背景にある生物統計学への理解が欠かせませんが、周囲に易しくこれを説明できる人を容易には見いだせないでしょう。生物統計の書籍は数

多発行されていますが、大きく2つに分類されます。一つは統計用語の難解な定義と複雑な数学的解説に終始するものであり、いまひとつは安易な研究デザインのパターン化とそれらに応じた統計ソフトの入力法の解説本です。前者は理解自体が困難ですし、そもそも

research question を紡ぎ、研究デザインを選択する力が養えません。後者は誤用への最も危険な落とし穴です。康永先生が鉄則シリーズ第2弾で易しく、しかも単刀直入に解説しているのは臨床研究のデザインの仕方であり、臨床疫学を彩る様々な疫学・統計学のコンセプトであり、更には研究目的に応じた統計モデルの選択や、適用条件です。これらこそが臨床疫学を適切に使いこなすために必要な知識であり、次世代を担う若手研究者が知るべきもののなのです。後半には難解な数学を駆使せずに様々な多変量解析のポイントや欠損値や交絡への対処法などを、最新の情報も交えて驚くほど分かりやすく解説しています。全編を通じて親しみのあるイラストや分かりやすい事例が差し込まれ、また、コラムには面白い話題が紹介されており、200 ページ余の中に様々な仕掛けが盛り込まれています。ぜひ康永マジックにどっぷりと浸って下さい。読み終わった時、きっと多くの読者が「自分でもできる」と感じていることでしょう。

平田 仁 (名古屋大学手の外科学)
[金原出版, 本体 3,200 円]

